以原質爲名

うらにかるなる、みつぶさむしろにまれ、そこにいる入江にかるなる、たなみむしろにまれ、七でうのなはむしろにまれ、侍らんをかさせ給へ、またさなくば、やれむしろにてもかさせ給へ、

〔倭訓栞中編二〕いなむしろ　日本紀の歌にみゆ、稲席の義、河の枕詞によめるは、苦席の稲に似たるよりいふといへり、萬葉集にいなうしろとも見えたり、うとむと通へり、一說に寢席皮とつゞけり、皮の疊の事、古事記、萬葉集等に見えたり、よて又萬葉集に敷ともつゞけいへりとぞ、後の歌には、稲の筵に似たるをも、稲を筵に敷くをも、又稲こくに用うるわら筵をいへり、

〔日本書紀十五顯宗〕天皇次起自整衣帶爲室壽曰、〇中略壽畢、乃起節歌曰、伊儺武斯廬稲席、苟簸河泝比野儺柳擬寐逗愈水行廡凱麼儺弭立企於巳陀智押曾能其泥播根不失宇世儒、

〔日本書紀通證二十顯宗〕伊儺武斯廬稲席也、謂以藁織者、萬葉集云、玉戈之道行疲、伊奈武思侶、敷而毛君乎、將見因母鴨、其屬乎次句者以柳枝靡水之狀、譬之稲席也、

〔住吉社歌合〕嘉應二年十月九日

旅宿時雨

二十三番　左　清輔朝臣

いなむしろ敷きつの浦の松風はもりくる折ぞ時雨ともきる〇中略

左歌、まつの風に時雨をまがへてもりくるおりぞ時雨ともしる、といへる心よろしくみゆるを、このいなむしろは、しきつの浦といはんためをけるなるべしとはみゆれど、いなむしろのほんたいを思ふに、しきつのうらにこそよかるべしとこそおぼえ侍ね、かはぞひやなぎのかげ、もしは田家などのたびねならば、おかしかるべし、住吉の松の下にはいなむしろしくべしともおぼえ侍らぬなり、またいなむしろばかりにて、旅のこゝろあるべしともおぼえぬ、いかが、

〔倭訓栞前編三十八〕りようびん　雅亮抄に、りうびんは色々にまだらなるむしろといへり、延喜